高齢社会をよくする女性の会会報

No.95　1997年4月発行

高齢社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿２－９－１
第31宮庭マンション802号室
ＴＥＬ.03－3356－3564
ＦＡＸ.03－3355－6427
郵便振替　00100-0-79477

―目　次―

三月例会・医療保険制度改革をめぐって … 1
オープンハウスのお陰で・中村朝子 …… 4
男・老いを語る㊻山本直英 …… 5
グループ活動報告・松本 …… 6
リレー・エッセイ㊲野中文江 …… 7
本の紹介・事務局だより …… 8

三月例会報告

一九九七年三月二十一日――――――――於・国立虎ノ門教育会館

医療保険制度改革をめぐって

講師　石井暎禧（医師、石心会理事長）
　　伊奈川秀和（厚生省保険局企画課課長補佐）
司会　樋口恵子（当会代表）

三月例会のテーマは今論議を呼んでいる医療保険制度改革のため、会員の関心も高く会場は満席で、特に男性の参加が目立った。まず、厚生省側、医療側の両者の視点から改革について語っていただいた。厚生省からは中村秀一氏（保険局企画課長）がご出席の予定だったが国会会期中の為、急遽伊奈川課長補佐が駆けつけてくださった。

伊奈川　医療保険制度の改正案を国会に提出した背景には国民医療費、特に老人医療費の増大がある。平成七年度の医療費（見込）は二七兆円強だが、高齢者の医療費は若年層の約五倍となっており、高齢化のピーク時（二〇二五年）には国民医療費の二分の一が老人医療費になると予測される。（次頁図参照）

一方医療費の財源を見ると、バブル経済崩壊後、賃金に応じて徴収される保険料収入が減少している上、国の一般歳出が伸び悩んでいるため、国の予算に占める医療費の割合は増大し現在一五％となっている。

このように医療保険の各制度の財政状況は非常に厳しく、政府管掌保険（財政規模七兆円）を例に見ると、平成一三年には一兆八〇〇〇億円の赤字が予測される。組合健保や国民健保も同様の厳しさ

である。

一方、現在の医療内容に対する不満もある。医療保険制度は、もともと保険料、公費負担、患者の一部負担からなるが、これらを投じて赤字になるほどのお金を使っても、例えば入院日数が長い、薬剤比率が高い、待ち時間が長いなどの問題が指摘されている。

こうしたことから、二年前より医療保険審議会において今後の医療保険制度のあり方について検討してきた。またこれと並行して、高齢者の医療や介護の問題についても総合的に考えようということで老人保険福祉審議会でも介護保険等を含む諸問題について検討を重ねてきた。その結果を踏まえて作られたのが今回の医療保険制度の改正案である。その概要は以下の通り。

趣旨：国民皆保険制度は二一世紀においても安定的に維持させるべき。そのためには現在の危機的経済状況を改善することが急務。今回の改正は二一世紀に向けての医療の総合的見直しの第一歩。

概要：①健康保険制度／医療保険構造改革審議会の設置、患者負担の改定（本人負担現行一割を二割、外来薬剤一種類一日分一五円）、政管保険の保険料率引き上げ②老人保健制度／患者負担の改定（外来現行同一医療機関ごとに月一〇二〇円を一回五〇〇円、ただし、同一保険医療機関ごとに、一月四回を限度。入院一日現行七一〇円を一〇〇〇円）③国民健康保険制度／患者負担の改定（薬剤負担の導入）、財政基盤の安定策（全国一六六国保組合への補助金見直しなど）。

施行：平成九年五月一日

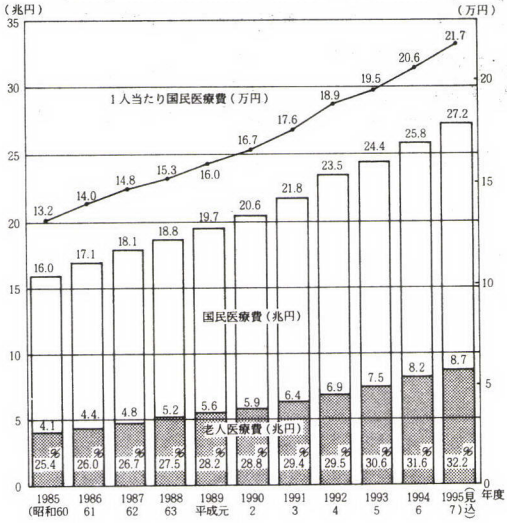
医療保険制度については今後三年間で総合的な見直しをする予定であり、この後、老人保健制度、社会的入院、急性期医療、在宅医療、診療報酬体系、薬価基準等の改正を予定している。

樋口　人生五十年を前提とした制度が破綻したための改革であるが、改革の方向はこれでいいのか？　次に医療の現場からこの意見を石井先生に伺いたい。

石井　ある雑誌に介護の社会化を唱えるという論旨で、アルツハイマーの妻を看取った方の意見が掲載されていた。その概要は「アルツハイマーと診断された妻を自宅で二年間介護してきたが症状が悪化したので入院を依頼したところ『病院は治療して病気を治す所なのでアルツハイマーの患者は入院させられない。老人ホームを探したら』と断られた。家族としては、ただ介護だけで死を待つのではなく、治す努力をしてくれる病院に入院させたいが、わがままなことだろうか。幸い良い老人病院が見つかり入院二年後に腎不全で亡くなった」というものであった。

これは、医療は積極的、介護は消極的

国民医療費の推移（資料・厚生省）



石井暎禧氏
高齢者医療に熱心に取り組まれ、当日は高熱をおして出席してくださった。

という患者側の思い込み、医師の、老人医療や介護への無知による誤った処置や患者に対する適切な説明の不足のために死期を早めたケースである。というのは老人病院に入院すると寝たきりになり、褥瘡や肺炎を起こしやすくなるので抗生物質を投与する。しかも食欲が落ち脱水症状が起こっている。そこで腎不全になる。この筆者は医療を望み、医者は適切な医療を施した、その結果としての悲劇的な死。これは特異なケースではなく、痴呆老人の社会的入院と言われているケースの典型であろう。

慢性疾患についてはさらに問題が深刻だ。日本の様々な医療制度は、感染症中心にできているため、医者が全権を持ち患者は医者に頼ればよいというものだが、今や疾患の殆どは慢性疾患である。慢性疾患は治らない病気、進行する障害であり、求められる医療は障害の度合いを軽くし進行をくい止めるためのものである。従って慢性疾患では医療の場は家庭でなくてはならない。また、患者が何を食べどのような生活をするかにかかっており、薬は補助的なものである。つまり医療の主体は患者である。医者の役割は、病気の性質を患者に理解させ治療をしながらの生活を営むように仕向けていく、いわば教育である。今後の医療システムは、医療の性質がこのように変化したことをしっかり押える必要がある。

伊奈川秀和氏
国会会期中の中村氏に替わって急遽駆けつけてくださった。

従って医療改革のためには、「介護は医療に含まれる」という従来の発想を「介護（＝生活）に医療を取り入れる」というようにパラダイム転換させなくてはならない。医者中心の医療や介護の考え方を根底から疑いながら新しいシステムを作る時が来ている。

樋口　有り難うございました。伊奈川さんには医療の抜本的改革が必要という石井先生に対する意見を、石井先生には今後の医療負担についてのご意見を伺いたい。

伊奈川　医療制度について語ると財政面に偏りがちだが、保険制度が医療の質にどこまで関与すべきかは難しい問題。

石井　医療費に限らず、老齢化社会に合わせた経済負担をする必要があろう。

〈以下は会場からの質疑応答〉

Q（男性）　①医療保険と健康保険の関係は？　②介護保険は二重負担では？　③払った保険料に応じた自己負担にできないか？

伊奈川　①医療保険とは健康保険、国民

健康保険、共済保険を包括したもの。②医療保険の中から介護の部分を切り離し、その負担を別の制度にしたのが介護保険。③医療保険はいつだれがどこで病気になるかわからない、そのリスクをみんなで負担するという考え方に基づいている。

Q（女性） 日本でも医者と患者が対等の関係になりうるか？

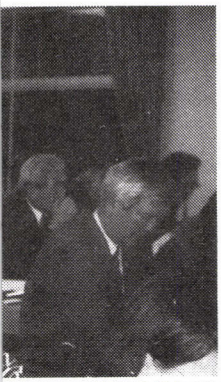
石井 若い世代の医者は対等だと考えそのように対応している。いばるのは自信のない医者だ。

Q（男性） 一部負担率を上げるのに診療抑制するのは矛盾ではないか？

伊奈川 一部負担の改定で医療保険における世代間の負担の公平を確保したい。診療抑制については薬の適正使用が目的。

この他にも活発に質疑応答が行われ、さらに多くの方が質問の挙手をされたが、予定の時間を大幅に過ぎたため、樋口代表の「医療に関する勉強会は今後も継続的に行う」の言葉で締めくくった。

（文責　前田由美）



男性の参加が目立つ会場

オープンハウスのお陰で

中村朝子

東京都住宅供給公社が、八王子市にはじめて建てた「終身ケア付き高齢者住宅明日見らいふ南大沢」へ入居して半年になる。

思えばここの募集を知って、運よく希望した住居に当選できたのも、オープンハウスで知り合った浜田利さん（運営委員）の母上のご他界で、お悔みに伺ったついでにと浜田さんが現地へご案内してくださったのがきっかけであった。

入居して二、三ヵ月経ったある朝の食堂で、「オープンハウスでお目にかかった中村さんでは――」と声をかけられてびっくり。林静枝さんであった。

古い記憶をたどって会報No.18号に目を通すと、樋口代表はじめ九名の出席者の写真が載っていて、その中に林静枝さんと、現在もオープンハウス担当の運営委員、富山稔子さんと私もいたのである。

夫君の為春氏が熱心な当会のファンで、シルバークリスマス料理講習会や、有料老人ホーム研究会には関心が深く、入居体験談が、当会編集の「われら有料老人ホーム探険隊」の二二〇頁に載っている。

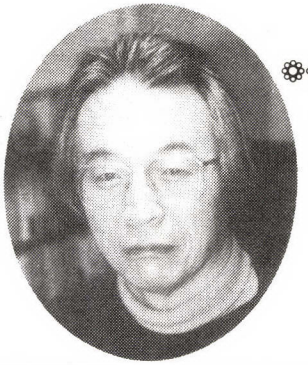
このあと、ご夫妻は、再び有料老人ホームへ入居したが、「明日見らいふ南大沢」の募集を知り、契約内容もまわりの環境も気に入ってここならと終の棲家に定めたとのことだった。ところが、無事入居の日程まで定っていながら、為春氏は僅か十日間の入院で肝臓癌のため急逝され、止むなく林さんは一人で入居されたとか。

つらかった胸中を涙ながらに打ちあけられ、私はお慰めの言葉もなかった。せめてもの救いは、私が同じ棟内の廊下伝いに行ける場所にいることを心強いと言ってくださったことであり、樋口代表がこの会を作って下さったお陰で心やさしい人達にめぐり会えたと、かつてのオープンハウスの常連だった会員の訪問をうけてよろこんでおられた。少しずつ笑顔も戻ってこられたので、そのうち会の勉強会にもお誘いしたいと思っている。

男・老いを語る㊻

≪老けれないの弁≫

山本直英（やまもとなおひで）



1932年生まれ。早稲田大学政経学部政治学科卒。吉祥女子中高校の副校長を経て、現在〝人間と性〟教育研究所所長。性教育唯一の専門誌『性と生の教育』編集長。近著に『セクシュアル・ライツ』（明石書店）『からだっていいな』（童心社）など。

いろんな原稿を書く日を送りながら、この一文を書き出してみて―確か樋口さんとほぼ同じ年齢なのに―老いについて書くのは初めてのような、久しぶりのういういしい気持ちを味あう。確かに今まで老いを「感じる」ことはあっても、語ったことも考えたこともなかったことに気づく。その私も今年の秋から「高齢者」に括られるというのに、これで良いのか悪いのか。ともあれ、老いを他人ごとのように思っていた私だったのだ。なぜなのだろうか、ちょっと一考してみる。

一つは、女子の中高校の勤務中に性教育に手をつけてから、今年で二九年。この間は何といっても若者のセクシュアリティに関わり続けたのと、若い教師と父母との出会いが多かったので「老けること」ができない心情であったこと。というのは老けてしまっては、多様な性の状況に共感できなくなるから。このことから老化防止には、何と言っても「性教育」の効果は大きい。

二つめは、私学の管理職という多忙な日々を、今から七年前に辞めてみたものの、その後の超多忙さは我ながらの驚き。性教育は人手が足りない分野だけに、需要に追い付かず、仕事が続々と舞い込む次第。大学時代の友人からは、退職後の話を聞かされていても、全く実感なし。こんな日々では、老後の対策どころか、今日の課題の処理に無我夢中であったため。このことから、意欲的に夢中になれる仕事があれば、年をとる余裕もないことが分かる。ただし、宮仕えもなく、上司や同僚に気を使わずにすむ自由業だからかもしれない。

もう一つは、幸いにも健康だったこと。

さて、六五歳直前でこんなのんきな述懐をしていていいのかどうか。つまり単なる「仕事人間」でしかないということ。樋口式名言の「産業廃棄物」はいやだが、本当の老後はどうなるのか。着いてみないと分からないという心情が正直のところ。

せめて「老後の性」について着手しようというのは、身にしみて実感、痛感。

高齢社会をよくする女性の会・松本

「高齢社会を明るく豊かに!!」公的介護保険であなたの老後は安心か

代表・橋本智子

花と緑と水の綺麗なこの二十万都市の松本は災害もなく実に住みよい処です。

それだけに高齢化率は高いのです。「福祉の町づくり日本一」などと市長は自慢していますが、実際は特養と養護がそれぞれ二つずつしかなく、いつもどこも百人待ちの実状です。もうこのあたりで家族介護から女性は解放されなければと思い、公的介護保険の事と併せて、国の老健の審議委員で、当会の代表である樋口代表をお招きして講演会を開催する事にいたしました。半年の準備期間を経て昨年六月十五日、それは梅雨の晴れ間の好い日でした。

会場の市民会館は一二〇〇人もの入場者で瞬く間にいっぱいになりました。

これはもとより代表の知名度によるものですが、それともう一つは今日的課題になっている介護保険に、市民の関心が高かったからだと思いました。

代表は老々介護から若い女性の結婚躊躇、中年の離婚等困った問題を指摘、これ以上介護を家庭に閉じこめてはいけないと自らの体験をユーモアをまじえて展開されました。

そして介護を、国民の命のフィナーレの安全保障ととらえ、国の責任と理解している私達一人一人が、国防を考えているのと同じ重さで介護を考えなければいけない、と明快に力づよくお話しになられ、聴講者一同深い感銘に身じろぎもせず熱心にきいておりました。

それ故代表も熱が入られ、時間を三十分も延長されての講演でした。

私共の様な小さな会も市民の皆さんから「好かったですねえ」「講演だけでこんなに大勢集まった事ははじめてですよ」などと激励されました。

地域の小さな会を育てようとなさる代表の御好意がひしひしと感じられ、本当に嬉しゅうございました。深く感謝申しあげます。

新しく入会した会員と共にしっかり、人間らしい老いのしあわせに向って頑張ってゆきたいと思っております。

リレー・エッセイ ㊲

八〇歳の立志

野中（のなか） 文江（ふみえ）

早春の三月、北京、西安、洛陽の旅に出た。団体旅行である。中高年優勢の参加を予想していったのだが、東洋史を学ぶ女子学生の二人組や卒業旅行の男子学生グループなどの参加があり、おかげで平均年齢はだいぶさがった。やはり多いのは六十代のカップルで、それぞれの持味で旅を楽しんでらして、ツアーの雰囲気をなごませていた。

高齢組で一目おかれていたのは、七七歳で一人参加の直子さんと八三歳と八〇歳の多田さん夫妻。

直子さんは一人旅だと部屋代が高くなるため、他の旅行説明会に一人で参加していた女性に話しかけ、お互い相手のいないときは一緒に旅をしようと誘い、今回の旅となったとのこと。その積極性と知恵に一同感心させられた。旅の間中つねに身軽に動き、気がつくとガイドさんの横、ツアーの先頭にいるのだった。

一方、多田さん夫妻はどんなおりにもきちんと二人の意志を厳密に伝えあい、尊重しあっているのがすがすがしく痛快ですらあった。妻の静野さんは片時もメモを離さず、帰りのバスのなかで感想を多田さんと交換しあい、論じあっている様子であった。

その静野さんと西安から洛陽の汽車のなかで雑談していたおり、私はとても新鮮な言葉をきいた。ご存じのように、西安・洛陽間は中国の原点のような黄土高原の真っ只中を走る。荒涼として、ときには大地は急に深く落ち込み、日本の柔らかな風景からは想像もつかない険しさが果てしなく続く。はっきり言って、人が住んでいるとも住めるとも思えない光景である。しかし一面黄色のその大地のわずかな耕地も丁寧に耕され、可能なかぎり麦が植えられ、青く芽ぶいている様子を眺めて静野さんはつぶやいた。「私は、立志ということが好き、この景色を見ると人間の可能性には限りがないと思う。なんでもできる。」

私はまだ五十代半ば前だが、久しく立志という言葉を忘れていた。また人の可能性に思いを馳せることも少なくなっていた。直子さんに、静野さんに刺激された旅であった。

プロフィール

一九四三年東京生まれ。早稲田大学卒業。編集者。主に「女・子ども・年より・アジア」関連の本造りに従事。昨年「写真絵画集成・日本の女たち」全六巻編集。当会理事・運営委員

（次は駒野陽子さんにお願いします。）

本の紹介

厚生省「福祉汚職」

一番ヶ瀬康子　川井龍介編

（労働旬報社　本体一五〇〇円＋税）

厚生省のトップ官僚が関わった特別養護老人ホームをめぐる汚職事件は、国民に大きな衝撃を与えました。なぜ、「福祉」と「汚職」が結びついたのか、「福祉はそんなにもうかるのか」という疑問の声もきかれました。

公判が始まり、事件そのものは明らかになるでしょう。しかし、超高齢社会を目前に、福祉の充実が社会全体の課題となっているときに、日本の福祉行政はどうなっているのだろうか、という国民の不安は解消されません。

本書は、施設や自治体、教育の最前線で長年にわたって福祉に取り組んでこられた人たちが、事件のメカニズムを分析しながら、汚職事件を発生させた日本の福祉の現状と問題点を明らかにし、さらに今後の福祉への提言をまとめたものです。

住民の福祉への関心が高いところでは汚職など起こらないと言われます。福祉を自らのものとして考えるために、ぜひご一読いただきたい本です。

『おしゃもじのあけくれ』

―浦和主婦会とともに―

細川かう著

（朝日新聞出版サービス　頒価一六〇〇円）

核家族化がすすんで、一家の主婦の座の交替を表す「おしゃもじ渡し」の言葉も聞かれなくなった。

著者の細川かう（こう）さんが八十歳を機に、長い間の社会運動に自分史を編み込んでまとめた本書。これこそ次の世代に語りつぎたいという運動家としての「おしゃもじ渡し」に他ならない。

元朝日新聞記者、むのたけじ氏は「あきらかにあの戦争期を分水嶺として（細川さんは）脱皮し、前進した。それをうながしたものは何か。この問いに、さまざまな実践記録で答えているところがこの本の眼目ではないだろうか」と記す。

前半生の封建的な家族制度の抑圧が強かった分、その反動が大きかったと著者。消費者・住民・女性運動等を通じて社会改革に挑み、零歳時保育実践のためには六十八歳で保母資格を取得した努力の人でもある。当会の第六回埼玉大会実行委員長を務めたのはその後のことだ。読んで、おしゃもじを受けとめてほしい。

事務局だより

近くの新宿御苑も多彩な緑色が溢れています。今年度もどうぞよろしく。

※早速で恐縮ですが、新年度の会費をご納入いただけますようお願いいたします。（すでに納入済みの方には振込用紙を入れてありません）お確かめください。

※五月例会のお申し込みはお早目に。四月の映画とトークの会は満席になるのが早く、お断りをした皆様にはお詫びいたします。

※総会のお知らせと出・欠ハガキを同封しています。締切日までに必ずハガキをご返送ください。懇親会をたのしみにしていらっしゃる方、今年は〝花よりタンゴ〟つき。お誘い合わせてお申し込みを。

※今年度もオープンハウスは原則として奇数月の第四(月)の予定です。五月二十六日(月)十一時～十六時、お待ちしています。

※

◆会報発送等のボランティア募集中！ご協力いただける方は事務局に登録してください。お願いします。（新井倭久子）